

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 20 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520424

研究課題名(和文)ポルトガル北東部のミランダ語を中心とするアストゥリア・レオン語の言語変異の研究

研究課題名(英文)A study of the linguistic variation between Astur-Leonese languages in Northern Portugal and North Spain

研究代表者

黒沢 直俊(Kurosawa, Naotoshi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：80195586

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：ポルトガル北部からスペインの北部に分布するアストゥリアス・レオン諸語の、アストゥリアス語とミランダ語という上層言語の異なる変種を歴史言語学的観点から考察した。アストゥリアス州での前後3回の現地調査で、現地の専門家などと協力しながら言語状況の把握や資料の収集を行い、コーパス構築に向けた作業を開始した。この分野は、中世ポルトガル語研究にも様々な視点を提供し、この間、所有詞に関しポルトガル語研究の枠では指摘されなかった研究展開の方向を示した。

日本では研究者は少ないので、現地と関係を保ちながら研究調査する意義は大きい。今後、研究代表者の専門のポルトガル語研究にも新たな知見を提供出来る。

研究成果の概要(英文)：From the Astur-Leonese languages, spoken in the region which expands from North-Eastern Portugal to Northern Spain, we have selected two varieties, Asturian and Mirandese, having the different superior official languages in their diglossia situation. During three times field investigations in Asturian Province in Spain in close cooperation with local investigators, we tried to understand the linguistic situation and to collect linguistic data. It has begun the construction of linguistic corpora of this group of dialects. The results from the study of this linguistic group offer various new insights to the historical investigation of Medieval Portuguese and in this context we have presented a new framework of study about the possessive expressions in Portuguese, otherwise non-existent in traditional studies.

It is very meaningful to develop the investigation in tight relationship with locals in Japan and we will and can provide many meaningful new insights to the study of Portuguese.

研究分野：イベロ・ロマンス語学

キーワード：危機言語 言語学 方言学 言語政策 イベロ・ロマンス語学 アストゥリアス・レオン語 ダイグロシア 歴史言語学

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、主にポルトガル語の歴史的研究を専門とし、中世の韻文や散文などについて研究を行っていたが、初期ポルトガル語を研究するにあたって、アストゥリアス・レオン語の影響を受けた文献が多数あり、そのような中世語テキストを調べていくうち、現代のミランダ語の地理的分布がかなり通時的変化を反映するような形で漸進的変異を示しているにも関わらず、全体像を明らかにするような研究が存在しないことに気付く、この研究を着想するにいたった。

(2) 1998年ポルトガルにおいて制定された法律にミランダ言語法と呼ばれるものがあり、これはポルトガル北東端地域のミランダ・ド・ドーロ郡における地域言語としてのミランダ語の言語使用権を認めるものであり、この時期にかけての地域での言語運動の高まりに因るものであった。同地域にはポルトガル語とは、同じロマンス語であるとしても厳密な意味では、言語系統を異にするアストゥリアス・レオン語に属するミランダ語、リオノール語、グアドラミレス語が存在することは知られ、過去に研究も存在したが、いずれもポルトガル語学の範囲内で扱われ、アストゥリアス・レオン語全体の中で位置付けるという観点が欠落していた。

(3) 2007年9月に研究代表者は試験的にミランダ人ネイティブの大学院生の協力のもとミランダ地域内各地で自然会話の収録を行った。加えて、リオノール語、グアドラミレス語についても現地へ赴き言語状況を調査したが、これらポルトガル国内に存在するアストゥリアス・レオン諸語を、この語派全体を考慮に入れつつ、スペイン国内のアストゥリアス語も主たる対象とすることで、スペイン語、ポルトガル語という上層言語の違いから生じる言語変異の違いを研究しようと構想するに至った。

2. 研究の目的

(1) ポルトガルのロマンス系少数言語ミランダ語について、現地の研究者や言語運動家と協力しながら、伝統的な話者を対象に自然会話を採集し、少数言語口語コーパスを構築し、さらにそのデータを基にスペインのオヴィエドを中心に分布するアストゥリアス語と比較対照することで、ポルトガル語とスペイン語という異なった上層言語がアストゥリアス・レオン言語グループに与えた影響を具体的かつ総合的に評価することを目的とする。

(2) アストゥリアス・レオン語に関する研究史を精査し、現在まで行われた研究を言語構造論、社会言語学、言語地理学、歴史言語学などの立場からどのように利用できるか検討し、クロスレファランティックな参照が可能な文献目録・研究史の再編を行う。同時に、ミランダ語やアストゥリアス語の臨地調査や中世の文献研究から得られた知見を元に、

中世アストゥリアス・レオン語からアストゥリアス語、ミランダ語への過程を跡付けることを通して、いわばアストゥリアス・レオン諸語に特有の言語特徴を取り出し、さらに上層言語のスペイン語やポルトガル語からの影響と思われる特徴と対比させる。

(3) この言語グループに対する一定量の自然言語コーパスを構築する。

3. 研究の方法

(1) 研究史の整理と研究資料の収集

ミランダ語にしてもアストゥリアス語にしても、アストゥリアス・レオン語グループに特化した網羅的なビブリオグラフィは作られてはいないが、暫定的な基本文献集や参考文献リストなど断片的なものは複数あるので、これらを統合し、地域や研究分野などからもクロスレファランティックに分類したりして利用できる、網羅的で可能な限り研究史を鳥瞰できるようなリストを完成させる。本研究の遂行に必要な基本的と判断されるものについての資料収集を行うが、いわゆる地域語の研究の中には、地方レベルでしか流通していないメディアによるものもあり、ミランダ語に関しては、ポルトガルのミランダ・ド・ドウロ市やブラガンサ市の図書館や研究施設、アストゥリアス語についてはオヴィエド市や周辺の大学、図書館、アストゥリアス言語アカデミーなどでの資料調査や現地研究者の協力が必要になる。

(2) 臨地調査による自然会話収録

ミランダ語やアストゥリアス語の自然会話収録の目的は、消滅しつつある言語状態を記録に残すということと、言語地理学的特徴の中には、当該言語域内での地理的変異の可能性のある二重母音化、口蓋化など、実際の言語使用の中で動的に変異しながら用いられていると思われるものがあり、それを確認し記述するということがある。さらに、臨地調査に際しては、特にミランダ語域内での地理的変異の可能性のある二重母音化、口蓋化などの特徴を十分反映するような語彙項目を多く取り入れた調査表を、リスボン大学から出版された言語調査票 (Questionário Linguístico, 1974) に基づき作成し、必要に応じて調査する

(3) 自然会話を含むコーパスの構築

上の(2)で得られた自然会話コーパスをデータベース化するとともに、これに文字資料から得られたテキストなどをコーパス化したものを加え、音声や形態論、統語論の記述や分析が可能な程度の言語コーパスをアストゥリアス語とミランダ語を対象に構築する。また、アストゥリアス語については、中世語についても最近のエディションに基づきコーパス化した資料を構築する。

(4) 言語構造と史的メカニズムの解明

構築されたデータや過去の研究に基づき、中世語資料などとも対照させながら、現代のミ

ランダ語やアストゥリアス語における音声や形態論、統語論の分野での共時的メカニズムや史的变化、言語接触の影響などを評価する。

4. 研究成果

(1)当初はポルトガル国内のミランダ語を中心に展開されるはずであったが、研究初年度から開始したアストゥリアス地域を対象とする臨地研究によって、研究の全体的計画が大きく変容したものの、2010年、2011年、2013年の3回に及びアストゥリアス州のオヴェイド、カンガス・デル・ナルセア、シジョン(ヒホン)における現地調査やアストゥリアス言語アカデミーが主催する研究セミナーなどに参加した結果、これまでの研究史的蓄積に関し十分な情報を得ただけでなく、より現代的な研究動向を熟知することができた。現地研究者や言語運動家とも緊密なネットワークを構築した、アストゥリアス語に関する言語構造的な理解を深め、方言的変種に関する現代的な最先端の情報を蓄積し、自然言語データの構築をすすめただけでなく、アストゥリアス地域でアストゥリアス人対象のアストゥリアス語の教授資格に相当する、アストゥリアス語の十分な運用能力を伸ばすことができた。

(2)ミランダ語については、この研究に先行し2007年の現地調査を皮切りに言語状況の把握と資料収集、自然言語コーパスの構築に着手していたが、一定程度の研究蓄積はあるものの、ほとんどが現地言語運動家やそれに近いポルトガル人研究者などによるもので、肝心のミランダ語本体について外国人研究者がアプローチするための情報や資源に欠けていたところ、アストゥリアス語そのものの研究を進めるにつれて、特にその西部方言の研究や理解からミランダ語に対するアプローチが容易になった。同時に、ポルトガル東北端部においてはミランダ語の他に、リオノール語やグアドラミレス語というアストゥリアス・レオン語に属する言語が存在すると伝統的には言われてきたが、アストゥリアス州の西部に分布するガレーゴ・アストゥリアス語と呼ばれる、系統的には、ガリシア・ポルトガル語に属する方言との対比研究の可能性に到達したことは、新たな観念の導入と言わねばならない。

(3)アストゥリアス・レオン諸語の、アストゥリアス語とミランダ語という上層言語の異なる変種を歴史言語学的観点から考察することにより、これらの言語に対するポルトガル語やスペイン語の影響を評価する視点を確立した。今後、ミランダ語に存在するとされ、史的言語学の立場からの解明が困難だった人称不定詞についての研究にも、一定程度の貢献が期待される。この地域は、ガリシア語からアストゥリアス語、カスティーリャ語、アラゴン語、カタロニア語へと続く、いわば原イベロ・ロマンス語方言連続体の一

部で、スペインの国語であるカスティーリャ語化に伴う変容があったとしても、方言的には過去の状態をかなり反映しながら言語接触による影響を受けてきたので、将来的にはこれらをすべて統一的に扱うことでイベロ・ロマンス諸語の研究全体に対する貢献が期待される。

(4)日本ではこの分野の研究者は少ないので、現地と関係を保ちながら研究調査する意義は大きく、特にこの観点から、アストゥリアス語について東京外国語大学のオープンアカデミーや国際日本研究センターなどでの啓蒙や紹介に努めた。

(5)アストゥリアス語は、ミランダ語同様、孤立した地域で公用語化の外に存在したため、規範的変種の形成やコイナー化が起こらず、地域内の方言変種が漸進的推移を見せて分布している。その結果、アストゥリアス語の言語構造や方言変種のなかには、ポルトガル語などの周辺公用語においては、その初期の段階で消滅してしまった特徴を未だに認めることができる。そのような観念に立ち発表した、または準備しつつある研究成果という関係では、ポルトガル語の所有表現に関して、従来、指摘されてこなかった *de meu...* のような前置詞 + 所有形容詞男性単数形に凝結した形の存在を指摘し、アストゥリアス語同様、この形がラテン語の人称代名詞の属格形に起源する可能性を示唆する考察を発表した、リオノール語の言語帰属についての考察を準備中であるが、基本的資料はアストゥリアス州の方言研究に関する先行研究から得ている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

- (1) 黒澤直俊 アストゥリアス語の所有表現の一形式 *de mio (/to/so...)* を囲って - 周辺言語、特にポルトガル語との関係から - , 『東京外国語大学論集 89』, pp.111-130, 査読なし, 東京外国語大学, 2014年12月31日
- (2) 黒澤直俊 データ: 「他動性」ポルトガル語・アストゥリアス語, 『語学研究所論集 第19号』, 229-243 ページ, 査読あり, 東京外国語大学語学研究所, 2014年10月
- (3) 黒澤直俊 前置詞に見るイベリア半島西部の時間と空間, 『ロマンス語研究 46号』, 27-34 ページ, 日本ロマンス語学会, 2013年5月
- (4) 黒澤直俊 アストゥリアス語, 『東京外国語大学オープンアカデミー 2011年度後期公開講座「外語大の教師が熱中するもうひとつの言語」活動報告書』, 101-123、

査読無、東京外国語大学語学研究所、2013年

- (5)黒澤直俊 中世ポルトガル語における-er型動詞の過去分詞について、『東京外国語大学論集 83』, 383-394, 査読なし、東京外国語大学、2011年12月31日

〔学会発表〕(計3件)

- (1)黒澤直俊 "... sempre a tive de meu." : 所有の一表現 de meu (/ teu / seu...) について、日本ポルトガル・ブラジル学会 2014年度大会(於 京都外国語大学)、2014年10月11日
- (2)黒澤直俊 ポルトガル語、アストゥリアス語、スペイン語 一隣接言語の諸相、「外国語と日本語との対照言語学的研究」第12回研究会、於東京外国語大学研究講義棟4階419室、東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門主催、2014年3月8日
- (3)黒澤直俊 前置詞に見るイベリア半島西部の時間と空間、日本ロマンス語学会第50回大会(於 上智大学)、2012(平成24)年5月19日

〔図書〕(計1件)

- (1)黒澤直俊 ブラジルの言語政策 - 言語史におけるポルトガル語 -、世界の言語政策 第3集 多言語社会を生きる、山本忠行、川原俊昭編、211-222頁、くろしお出版、2010(平成22)年12月10日

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

黒沢 直俊 (KUROSAWA, Naotoshi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：80195586

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし